

教科に関する調査の結果概要

【小学校】

国語A（知識）、算数A（知識）、算数B（活用）において全国平均を上回った。国語B（活用）及び理科については、全国をやや下回ったが、大阪府平均を2P上回った。

【中学校】

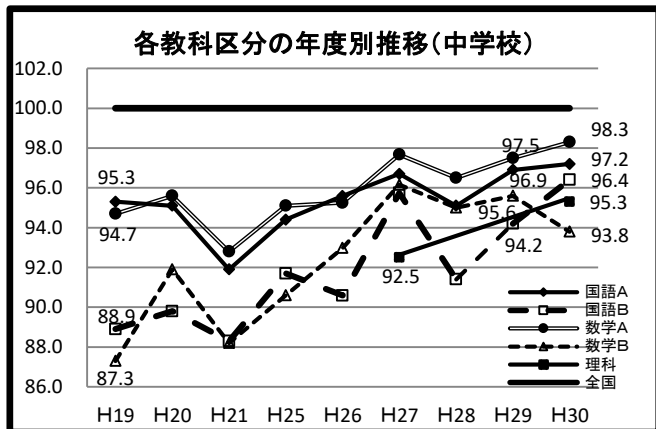
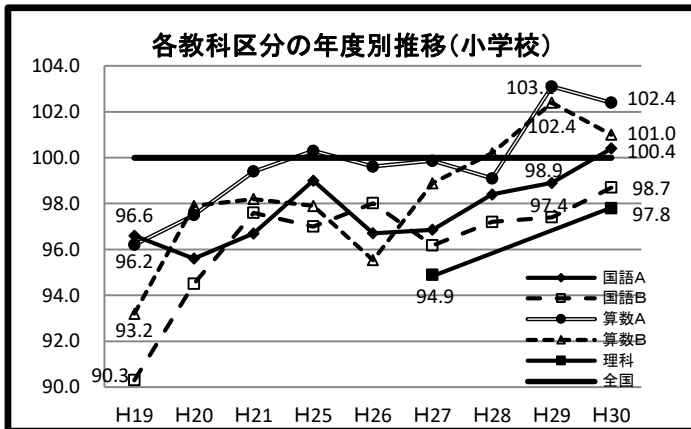
中学校は、国語A（知識）及びB（活用）、数学A（知識）について改善が見られ、全国平均との差が小さくなり、府平均と同程度となった。数学B（活用）については、全国平均及び府平均を下回った。理科については、全国平均、府平均を下回ったものの、平成27年度と比較すると改善が見られた。

「堺版授業スタンダード」（平成27年3月策定）を中心とした各校における授業改善は進んでおり、今後も言語活動の質の向上や問題解決的な学習に取り組み、学力の向上を図る。

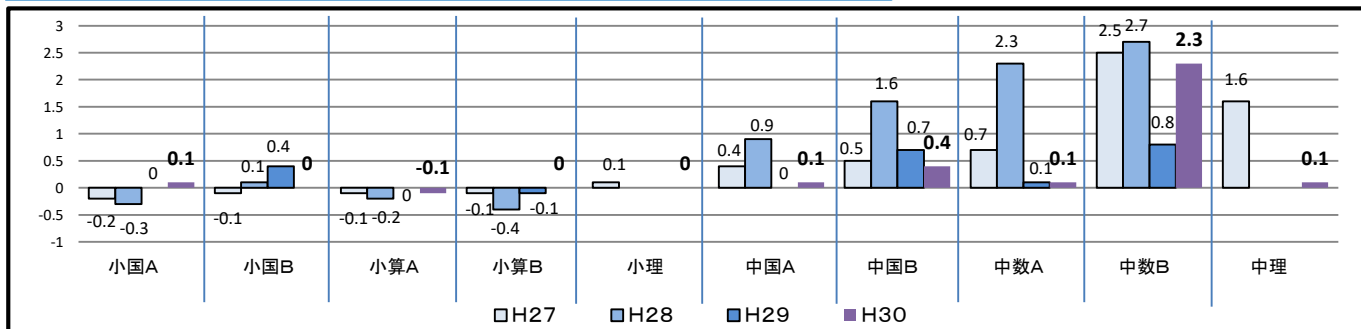
平均正答率の経年比較(全国・大阪府と堺市)

		H27				H28				H29				H30				
		堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	
小学校	国語	A区分	67.8	67.6	70.0	-2.2	71.7	71.3	72.9	-1.2	74	72	74.8	-0.8	71	68	70.7	0.3
		B区分	62.9	62.7	65.4	-2.5	56.2	55.4	57.8	-1.6	56	54	57.5	-1.5	54	52	54.7	-0.7
	算数	A区分	75.1	74.8	75.2	-0.1	76.9	76.9	77.6	-0.7	81	78	78.6	2.4	65	63	63.5	1.5
		B区分	44.5	44.1	45.0	-0.5	47.3	45.8	47.2	0.1	47	45	45.9	1.1	52	51	51.5	0.5
	理科	57.7	57.3	60.8	-3.1									59	57	60.3	-1.3	
中学校	国語	A区分	73.3	74.4	75.8	-2.5	71.9	73.5	75.6	-3.7	75	75	77.4	-2.4	74	75	76.1	-2.1
		B区分	63.0	64.8	65.8	-2.8	60.8	63.3	66.5	-5.7	68	69	72.2	-4.2	59	59	61.2	-2.2
	数学	A区分	62.9	64.3	64.4	-1.5	60.0	61.7	62.2	-2.2	63	64	64.6	-1.6	65	65	66.1	-1.1
		B区分	40.0	41.4	41.6	-1.6	41.9	43.1	44.1	-2.2	46	46	48.1	-2.1	44	46	46.9	-2.9
	理科	49.0	50.8	53.0	-4.0									63	64	66.1	-3.1	

全国平均正答率を100とした場合の堺市平均正答率 経年比較(H19-H30)



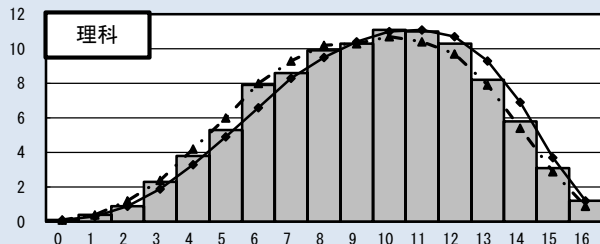
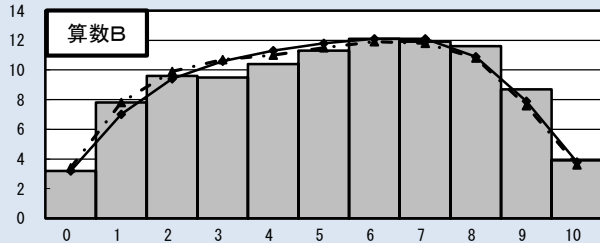
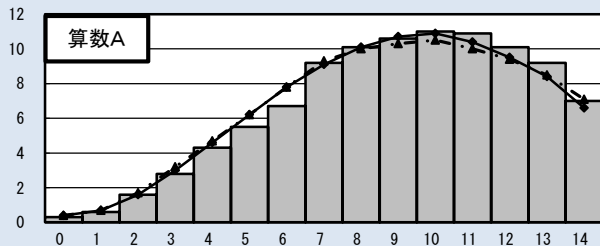
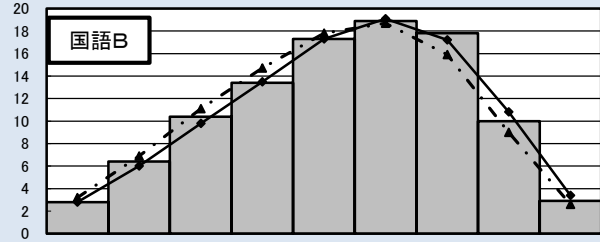
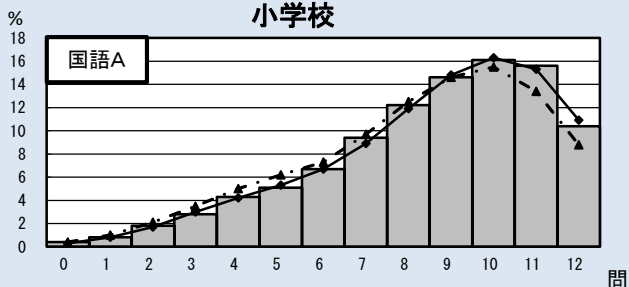
無解答率における全国と堺市の差 経年比較



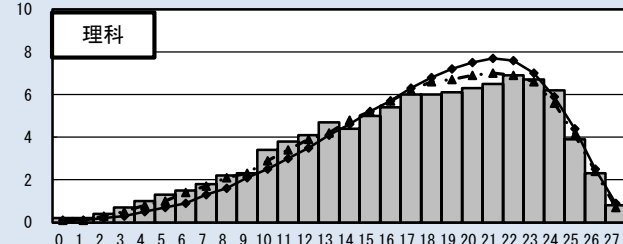
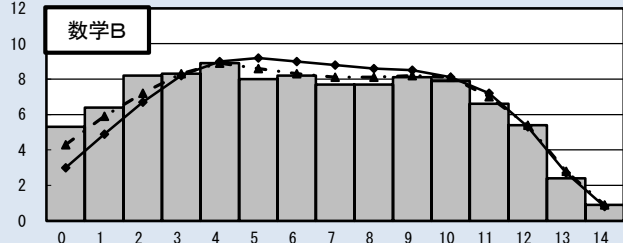
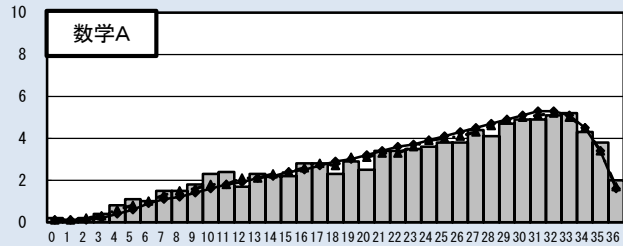
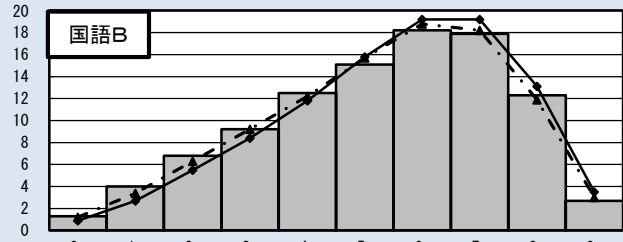
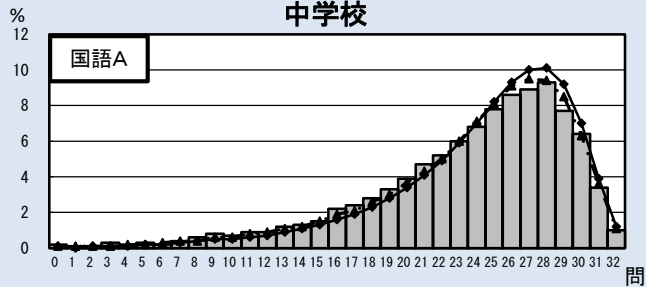
各教科正答数分布（全国・大阪府と堺市）

堺市 全国 大阪府

小学校

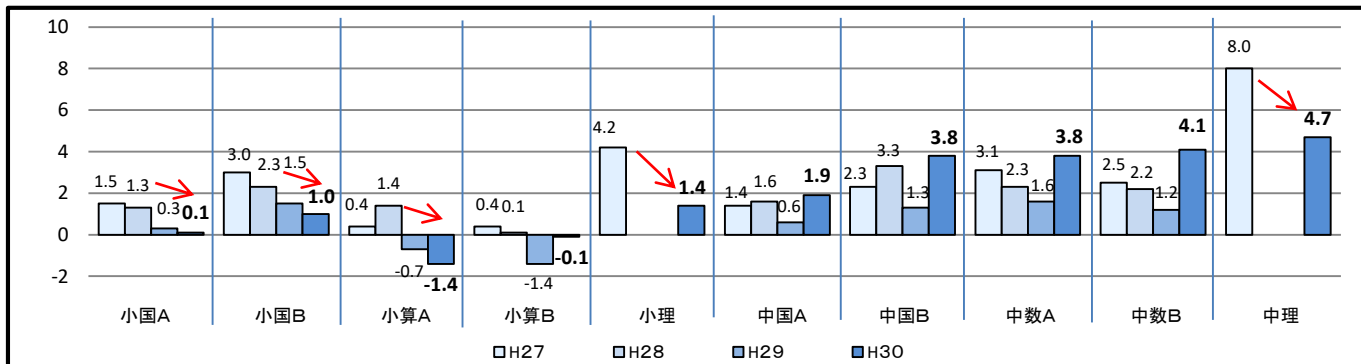


中学校



下位層（正答率40%未満）児童生徒割合の全国・堺市比較

改善

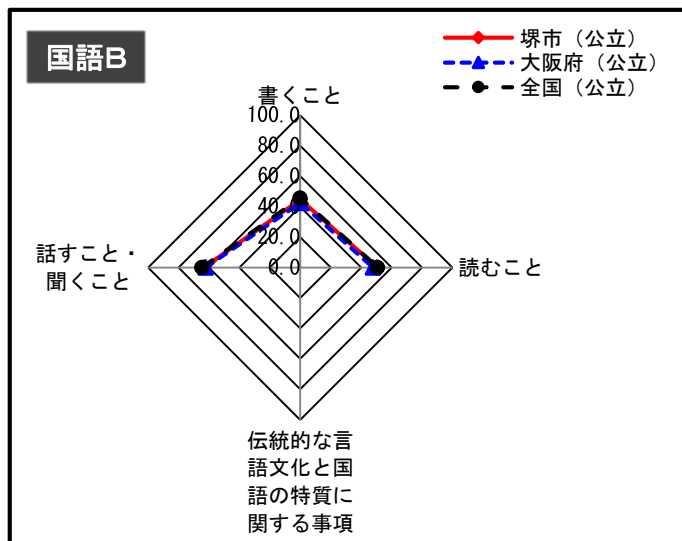
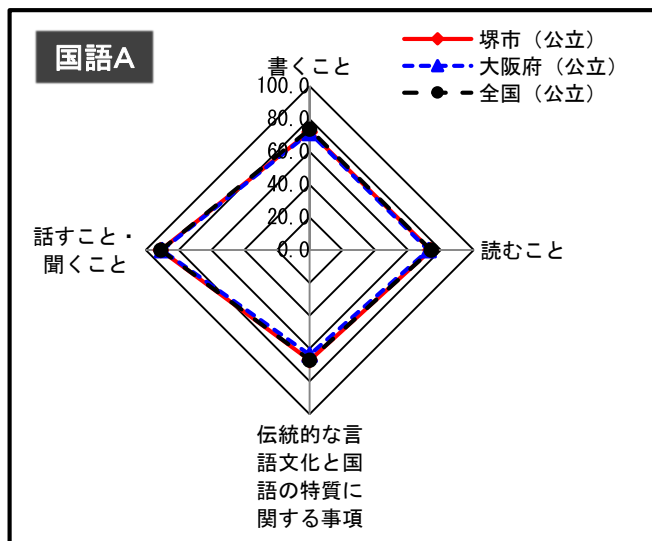


小学校国語

- A・B問題ともに読むことに関する問題では、全国平均程度となっている。
- A問題の話すこと・聞くことに関する問題や、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に関する問題は、全国平均と同程度であり、基礎的・基本的な事項の定着が図られている。
- B問題において、記述式における問題の正答率が低い。文章の内容を的確に押さえ、目的に応じて書くことに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	A問題(12問)			B問題(8問)				
		問題数 (問)	平均正答率(%)			問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)		堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		12	71	68	70.7	8	54	52	54.7
学習指導要領の領域等	話すこと・聞くこと	1	90.9	90.1	90.8	3	63.2	62.2	64.6
	書くこと	1	72.2	71.6	73.8	5	44.7	42.5	45.6
	読むこと	2	73.7	72.5	74.0	2	50.6	47.8	50.8
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	8	67.1	63.8	67.0	0			
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0				3	31.7	29.7	33.2
	話す・聞く能力	1	90.9	90.1	90.8	3	63.2	62.2	64.6
	書く能力	1	72.2	71.6	73.8	5	44.7	42.5	45.6
	読む能力	2	73.7	72.5	74.0	2	50.6	47.8	50.8
	言語についての知識・理解・技能	8	67.1	63.8	67.0	0			
問題形式	選択式	11	74.0	71.8	73.9	5	67.4	65.6	67.6
	短答式	1	33.1	28.0	35.5	0			
	記述式	0				3	31.7	29.7	33.2



■A問題では、「話すこと聞くこと」の領域で良好な結果となっている。B問題では「書くこと」に課題がある。

今後の取組

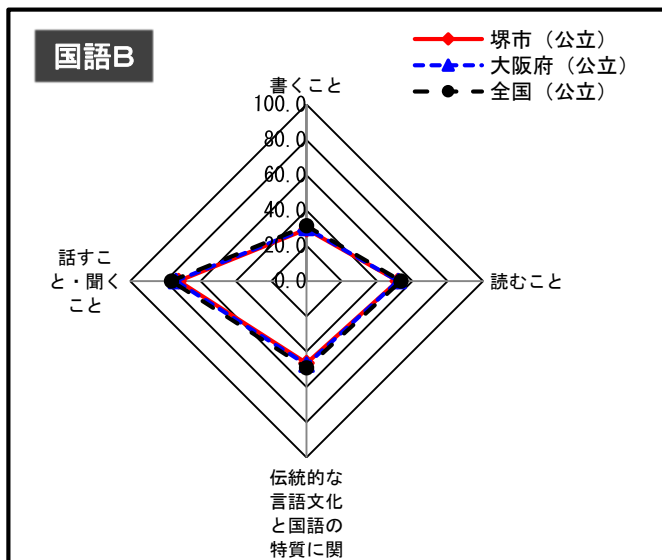
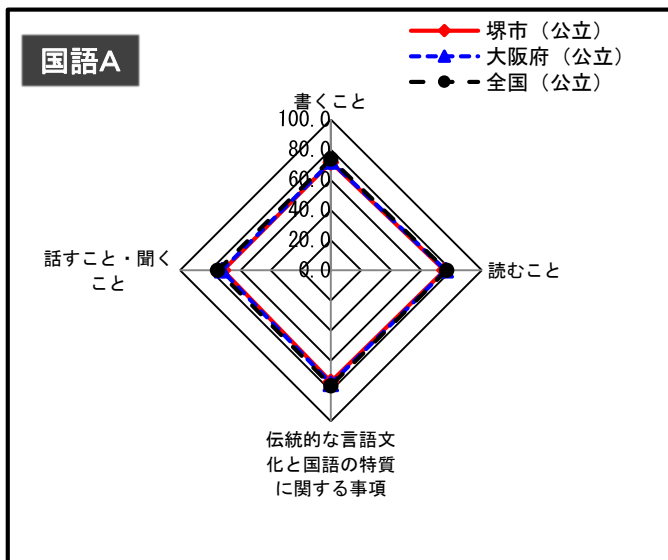
- 目的に応じて複数の本や文章を読み重ねたり、読み比べたりする学習の充実を図る。「何のために読むのか」「何を知りたいのか」「どのような情報が必要なのか」という目的を明確にし、全体の構成を把握しながら読むようにすることで、文章の内容を的確に把握することができる力を身に付けられるようにする。
- 複数の資料の情報から、目的や意図に応じて適切な内容を取り上げ、詳しく書く学習の充実を図る。その際、「何を」「どのように」取り上げ詳しく書けば、より効果的であるかを整理して書くようにする。また、国語科の学習で学んだことを、総合的な学習の時間など他教科でも活用することで、さらなる学習内容の定着を図る。

中学校国語

- A問題では、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のうち、「文脈に即して漢字を正しく読むこと」や「慣用句の意味を理解すること」の正答率が高く、基礎的・基本的な知識の定着が図られている。
- B問題では、「話す・聞くこと」の領域の問題は、正答率が約7割と高い。
- A・B問題ともにすべての領域で全国平均を下回っている。
- B問題では、「書くこと」の領域の正答率が3割を下回るとともに、記述形式の問題に対して課題がある。特に、「文章を読み、内容を的確に捉え、目的に応じてまとめること」に課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	A問題(32問)				B問題(9問)			
		問題数 (問)	平均正答率(%)			問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)		堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		32	74	75	76.1	9	59	59	61.2
学習指導要領の領域等	話すこと・聞くこと	3	71.5	72.3	75.2	3	72.5	74.0	76.6
	書くこと	4	71.7	72.2	73.9	2	29.4	30.0	31.3
	読むこと	4	75.3	76.1	76.7	6	51.7	52.0	53.5
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	21	73.9	75.2	76.5	1	46.5	47.4	49.2
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	0				3	47.7	48.9	50.3
	話す・聞く能力	3	71.5	72.3	75.2	3	72.5	74.0	76.6
	書く能力	4	71.7	72.2	73.9	2	29.4	30.0	31.3
	読む能力	4	75.3	76.1	76.7	6	51.7	52.0	53.5
	言語についての知識・理解・技能	21	73.9	75.2	76.5	1	46.5	47.4	49.2
問題形式	選択式	21	74.5	75.2	76.8	6	64.1	64.6	66.7
	短答式	11	71.9	73.8	74.7	0			
	記述式	0				3	47.7	48.9	50.3



■A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向が見られる。また、B問題は「書くこと」の領域における正答率が低い。

今後の取組

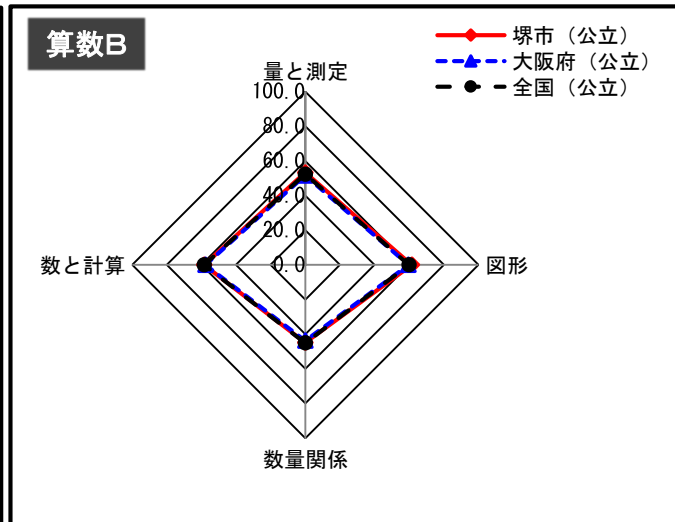
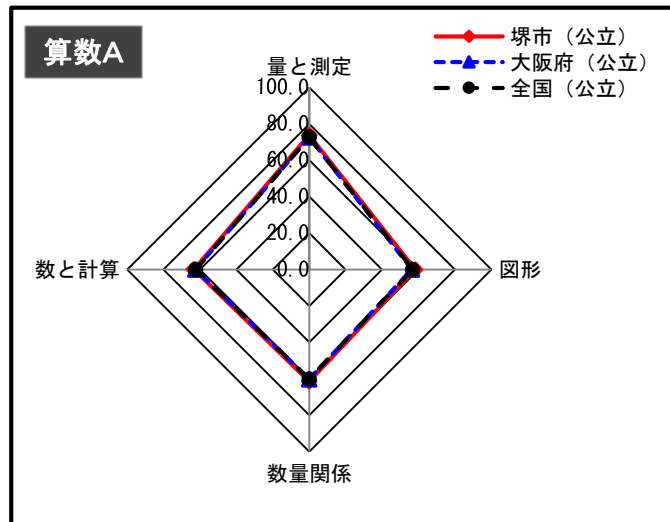
- 指導のねらいを明確にしたうえで言語活動を適切に位置付けることで、指導事項を確実に指導する。また、より質の高い言語活動になるよう、創意工夫することが大切である。
- 文章の内容を的確に読み取り、目的や意図に応じて文章を書くためには、文章の構成や展開に着目したり、状況の設定など、基本的な構成要素を捉えて整理したりする学習の充実を図る必要がある。また、推敲の際の観点の1つとして、相手に伝わる表現になっているかを確認し合う学習活動にも取り組む。

小学校算数

- A問題では、全国平均を上回り、基礎的・基本的な知識・技能を身に付ける取組が確実に進んでいる。
- B問題では、全国平均を上回り、問題解決的な学習の中で、言葉、数、式、図や表などを関連付けて説明する指導を丁寧に行った成果が表れている。
- B問題において、短答式の問題で全国平均を下回っている。
- B問題において、選択式、記述式の問題で全国を上回っているものの、正答率は低い。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	A問題(14問)				B問題(10問)			
		問題数(問)	平均正答率(%)			問題数(問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)		堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		14	65	63	63.5	10	52	51	51.5
学習指導要領の領域	数と計算	5	63.3	62.5	62.3	6	58.4	57.6	58.4
	量と測定	4	73.8	72.6	72.7	4	53.3	51.7	52.4
	図形	3	58.2	56.4	56.9	2	61.5	59.6	59.9
	数量関係	5	61.4	60.3	60.1	5	44.9	43.8	45.1
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0				0			
	数学的な考え方	0				9	49.6	48.3	49.2
	数量や図形についての技能	5	64.8	61.8	63.0	0			
	数量や図形についての知識・理解	9	64.8	64.2	63.8	1	73.6	71.8	71.7
問題形式	選択式	10	63.6	61.9	61.8	3	54.9	53.8	54.0
	短答式	4	67.8	67.1	67.8	2	65.3	64.9	66.6
	記述式	0				5	44.9	43.0	43.9



■ A問題ではすべての領域で、B問題では「量と測定」「図形」領域で良好な結果となっている。B問題の「数量関係」領域の正答率が低い。

今後の取組

- 「数量関係」の学習においては、児童自らが数量の関係を見だして考察し、さらに、その数量の関係がほかの場合でも成り立つことを確かめて、確かめた数量の関係を的確に表現できるようにする。
- 記述式の問題においては、「ある事柄が成り立つことの原因や判断の理由等について、論理的に説明すること」、「示された考えを解釈し、条件を変更した場合について考察した数量の考えに関する表現方法を適用して言葉と数を用いて記述すること」といった力を身に付けられるような学習活動の充実を図る。

中学校数学

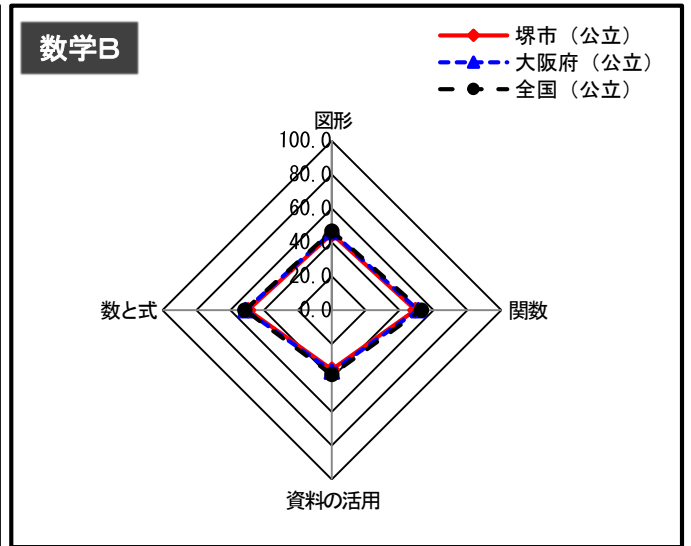
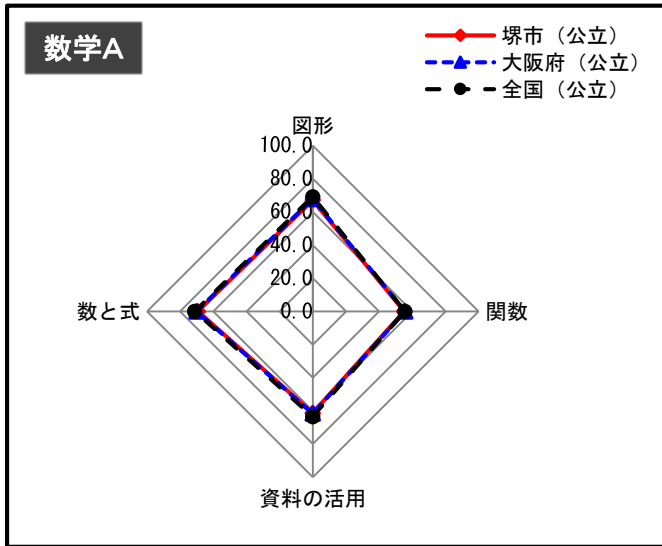
○A問題では、全国平均との差が縮まった。特に、「正負の数」「単項式」「比例式」を計算する問題は、全国平均と同程度であり、基礎的・基本的な内容の定着を図る取組の成果が表れている。

●B問題では、全国平均との差があり、知識や技能を活用することに課題がある。

●昨年度より、無解答率、下位層が高くなっている。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	A問題(36問)				B問題(14問)			
		問題数 (問)	平均正答率(%)			問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)		堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		36	65	65	66.1	14	44	46	46.9
学習指導要領の領域	数と式	12	69.3	70.1	71.1	4	49.5	51.0	51.4
	図形	12	67.1	67.8	69.1	3	45.0	46.0	46.7
	関数	8	55.2	55.7	55.5	3	49.3	50.9	52.8
	資料の活用	4	61.3	61.6	63.5	4	35.1	36.2	38.0
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0				0			
	数学的な見方や考え方	0				10	42.8	44.1	45.1
	数学的な技能	14	68.6	69.6	70.4	4	48.3	49.6	51.3
	数量や図形などについての知識・理解	22	61.9	62.4	63.3	0			
問題形式	選択式	18	60.5	60.6	61.5	2	58.7	59.6	61.5
	短答式	18	68.6	69.8	70.7	7	53.0	54.7	56.2
	記述式	0				5	26.6	27.5	27.9



■A・B問題ともに、概ね全国と同様の傾向がみられるが、A問題の「関数」では、全国平均との差が縮まった。B問題では「資料の活用」や「記述式」の問題が引き続き課題である。

今後の取組

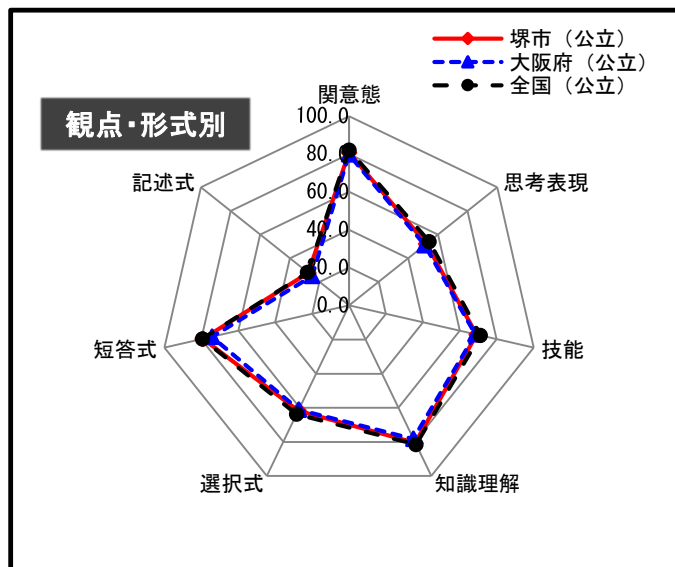
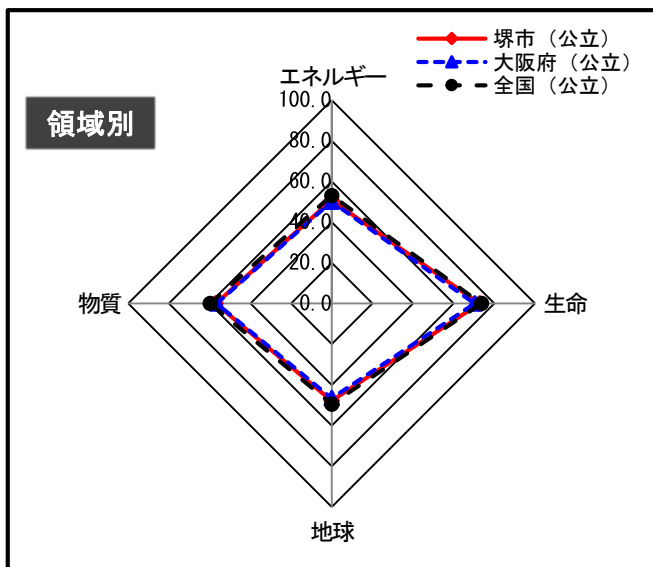
- 実生活の事象を目的に応じて数値化して判断する場面を設定したり、与えられた情報から必要な情報を選択し、解決するための筋道を立て、的確に処理したりするなど、堺版授業スタンダードをもとにした問題解決的な学習の充実を図る。
- ある事柄が成り立つ理由を説明するために、文字式や数学的用語を用いて根拠を明らかにするとともに、問題解決の過程を振り返り、判断の理由について検討したり、解き方を見直したりするなど、学び深める学習の充実を図る。

小学校理科

- 全国平均と比べて極端に正答率の低い問題がなく、全国平均との差が縮まった。
- 問題形式によらず、無解答率が低く、全国と同程度である。また、主として「活用」に関する問題では、複数の問題で全国平均を上回った。
- 「科学的な思考・表現」に関する問題の正答率が低く、実験結果をもとに分析、記述することに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)			
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)	
全体		16	59	57	60.3	
枠組み	主として「知識」に関する問題	3	77.0	75.0	78.0	
	主として「活用」に関する問題	13	54.0	53.0	56.2	
学習指導要領の区分等	A区分	物質	4	57.0	56.5	59.8
		エネルギー	4	50.7	50.1	53.1
	B区分	生命	4	72.7	70.3	73.6
		地球	6	47.8	46.6	49.5
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	1	80.7	79.8	82.1	
	科学的な思考・表現	12	52.2	51.1	54.1	
	観察・実験の技能	1	69.1	68.4	71.1	
	自然事象についての知識・理解	2	80.5	78.2	81.5	
問題形式	選択式	13	61.7	61.1	63.8	
	短答式	1	79.2	74.2	79.4	
	記述式	2	27.5	25.0	28.0	



■すべての領域・観点・形式において、概ね全国と同様の傾向が見られ、「記述式」問題に課題がある。

今後の取組

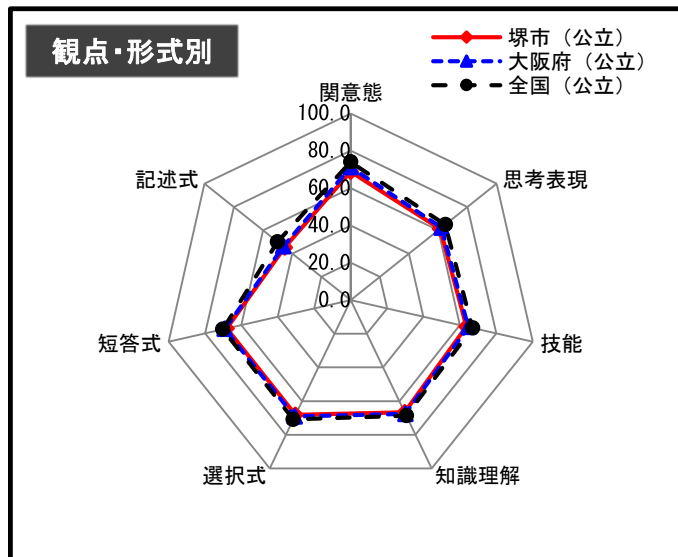
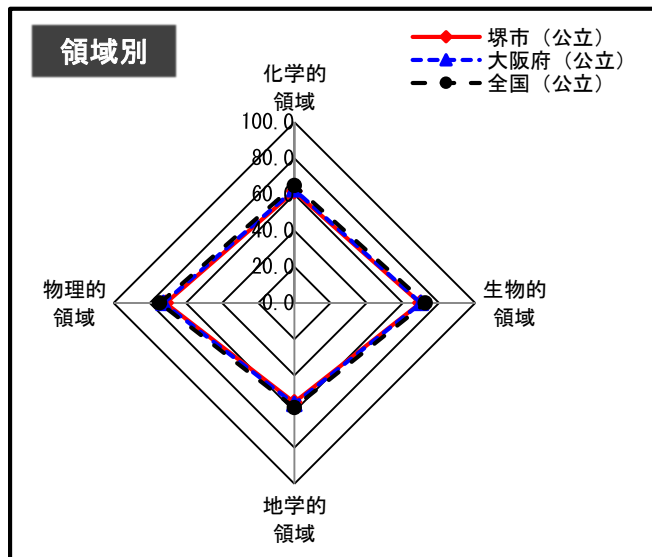
- 「堺版授業スタンダード小・理」を活用した「子どもが考える授業」への改善をさらに推し進め、見通しをもった観察、実験をとおして問題解決の力を育むとともに、ノート指導等を通して自分の考えをまとめる学習活動の充実を図る。
- 問題解決を行う際に、解決したい問題について互いの予想や仮説を尊重しながら追究したり、観察、実験などの結果を基に、予想や仮説、観察、実験などの方法の振り返りや再検討をしたりする。また、複数の情報や考えを比較し、よりよい方法を検討するなど、自分の考えを表現したり、見直したりする学習活動の充実を図る。

中学校理科

- 主として「知識」に関する問題では、全国平均との差が縮まった。また、複数の問題で全国平均を上回り、基礎的・基本的な事項の定着が図られている。
- 前回より、無解答率が減少し、全国平均との差も縮まっている。
- 前回より、下位層の割合が減少しているものの、全国平均よりも高い。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)			
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)	
全体		27	63	64	66.1	
枠組み	主として「知識」に関する問題	11	66.0	67.0	67.9	
	主として「活用」に関する問題	16	61.0	62.0	64.9	
学習指導要領の分野等	第1分野	物理的領域	7	71.2	72.4	74.4
		化学的領域	8	61.7	62.8	65.0
	第2分野	生物的領域	6	69.7	70.1	72.5
		地学的領域	7	55.0	55.9	57.8
評価の観点	自然事象への関心・意欲・態度	1	68.8	71.2	74.0	
	科学的な思考・表現	16	61.3	62.2	64.9	
	観察・実験の技能	4	63.6	64.7	67.0	
	自然事象についての知識・理解	8	66.7	67.6	68.7	
問題形式	選択式	17	68.2	69.1	70.9	
	短答式	4	68.1	69.2	70.2	
	記述式	6	45.2	46.1	50.1	



■観点別では「自然現象への関心・意欲・態度」、形式別では「記述式」問題において全国平均との差が大きく、課題である。

今後の取組

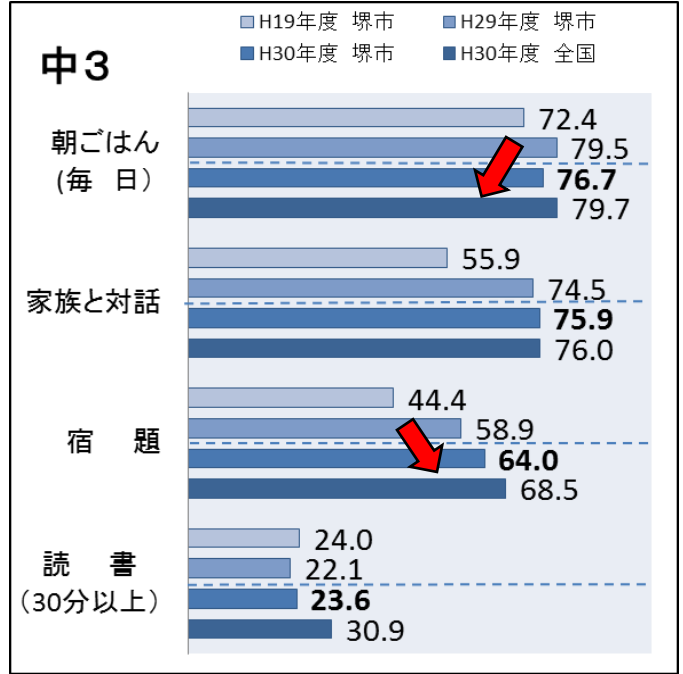
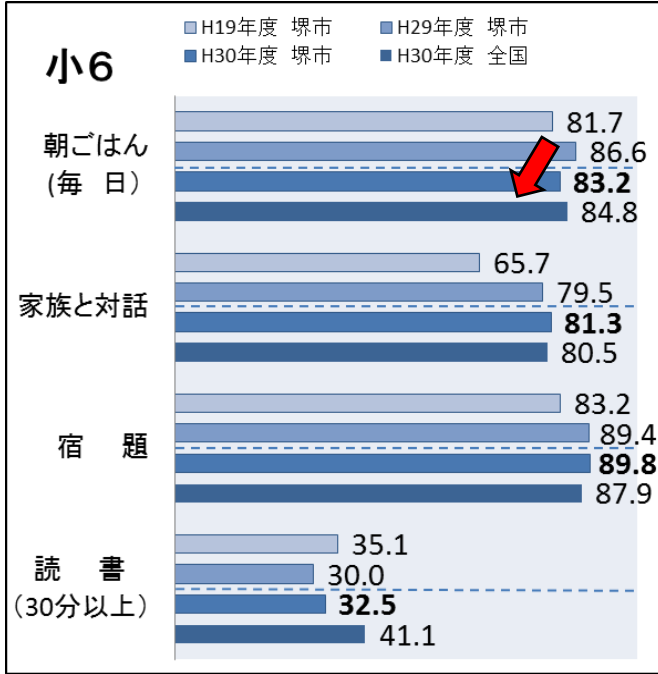
- 自然の事物・現象の中に問題を見出し、見通しをもって観察、実験などを行うことを通して、得られた結果を分析し、新たな疑問を持ち科学的に探究する活動を行う。
- 自ら課題を設定して観察・実験を行い、探求を深める活動を通して、自分の考えを書く活動の充実を図る。
- 日常生活や社会との関わりの中で、科学を学ぶ楽しさや有用性を実感しながら、生徒が自らの力で知識を獲得し、理解を深めることに加え、探求の過程を通して基本的な技能を身に付けるようにする。

学習・生活状況に関する調査の結果概要

◆ 家での7つのやくそく

～「毎日の朝ごはん」と「30分以上の読書」が課題～

- 小中学校ともに、平成19年度と比べて、「家族との対話」、「宿題」の項目において、改善が見られる。特に中学校の改善は顕著である。
- 小中学校ともに、平成29年度と比べて、朝ごはんを毎日食べている子どもの割合は、減少しており課題である。
- 平日30分以上読書している子どもの割合は増加しているものの、全国平均を下回っており課題である。



※「早寝早起き」「前日準備」「携帯電話やスマートフォン等の時間」は、質問紙調査を実施していないため記載していません。

ポイント



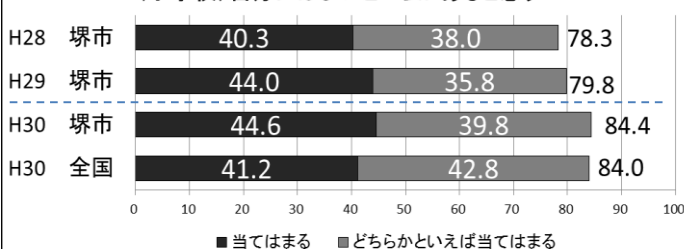
子どもたちが、家での過ごし方を自分で計画し、チェック、改善できるような機会を設け、自律的に生活する力を育みましょう。

◆ 自尊感情を育む教育

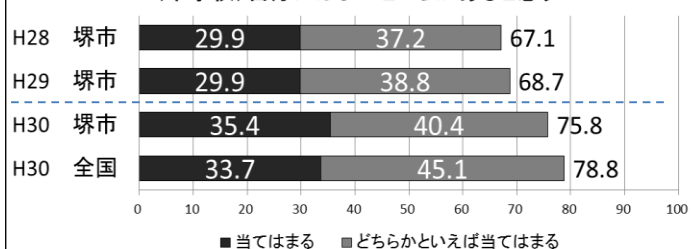
～子ども自身が自分の良さを感じられる取組の推進～

小中学校ともに、自尊感情については29年度より改善が見られた。「自分にはよいところがあると思う」の項目では、肯定的回答の児童の割合が全国平均を上回っている。引き続き、各校のこれまでの取組をさらに推進し、教育活動全般を通して、子どものよさを認めながら伸ばし、子ども自身が自分のよいところを感じられるような取組の推進を図る。

(小学校)自分にはよいところがあると思う

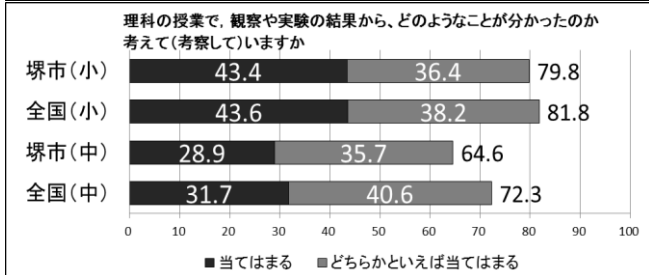
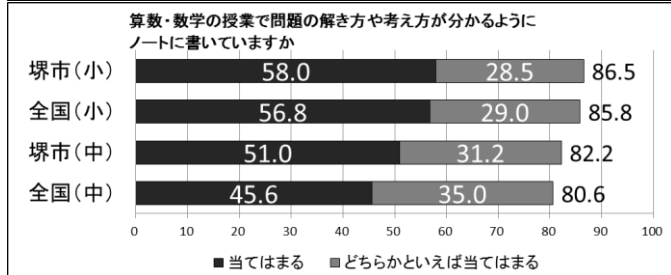
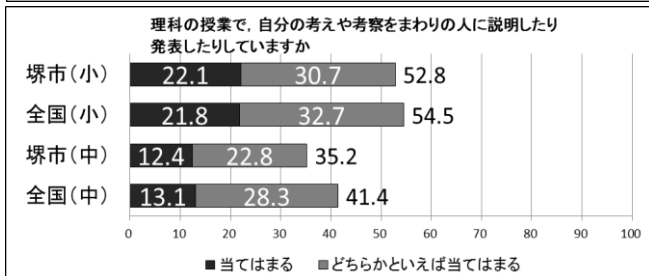
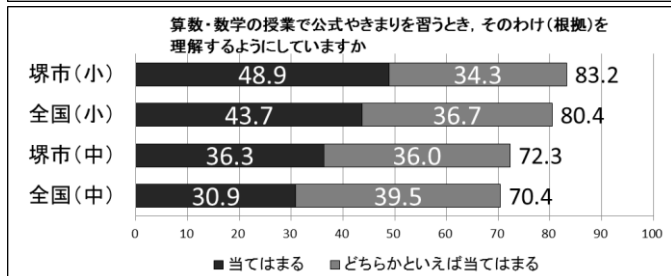
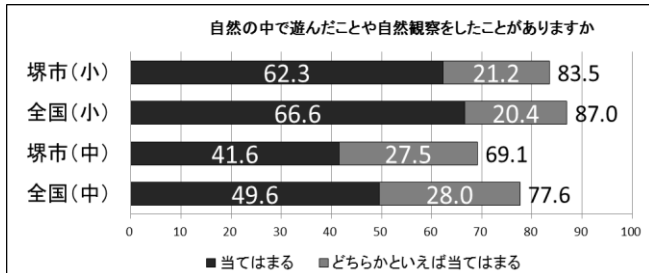
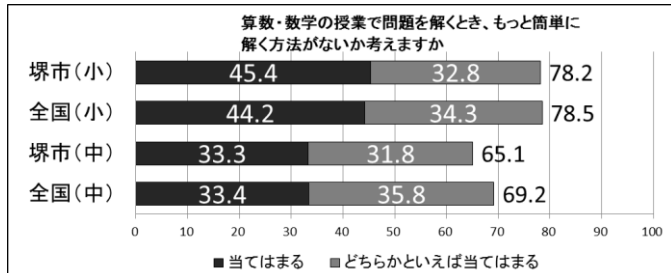
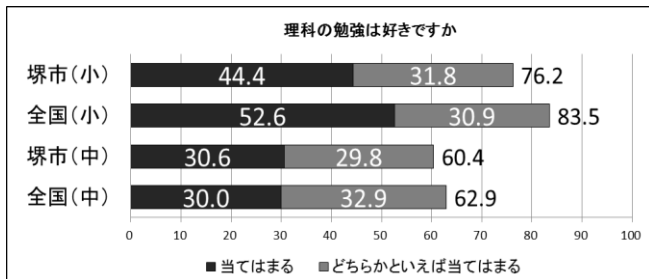
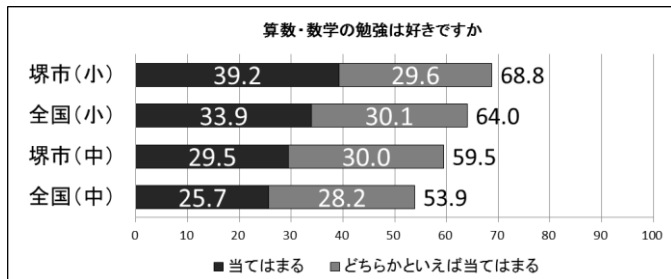


(中学校)自分にはよいところがあると思う



◆算数・数学・理科に関する項目 ~子どもが考える授業改善をより一層の推進~

- ◆算数・数学においては、全国平均を超えている項目が多く堺版授業スタンダードを基にした子どもが主体的に学ぶ授業改善が進んでいる。複数の考えを比較したり、よりよい解き方について考えることなど、さらなる授業改善に取り組む。
- ◆理科においては、全国平均を下回っている項目が多く、授業改善に課題がある。実験・観察の充実はもとより、自分の考えを表現したり、結果をもとに考えをまとめたりするなど堺版授業スタンダード小・理を基にした授業改善が急務である。



◆宿題+αの主体的な家庭学習 ~改善進むも30分以下の児童生徒が依然として課題~

小学校で30分以下と回答した児童の割合は、昨年度よりも3.2P減少し、改善が見られる。しかしながら、小中学校ともに30分以下の児童生徒の割合が全国よりも高く課題である。

家で全く勉強しない児童生徒に対して、1日1ページ漢字や計算の練習をするなどの課題を与えるなど、すべきことが明確な課題に取り組むことから始めたり、学校で5分だけ宿題に取り組み、続きを家でするなど、勉強の「きっかけ」をつくらせることなどに取り組む。

